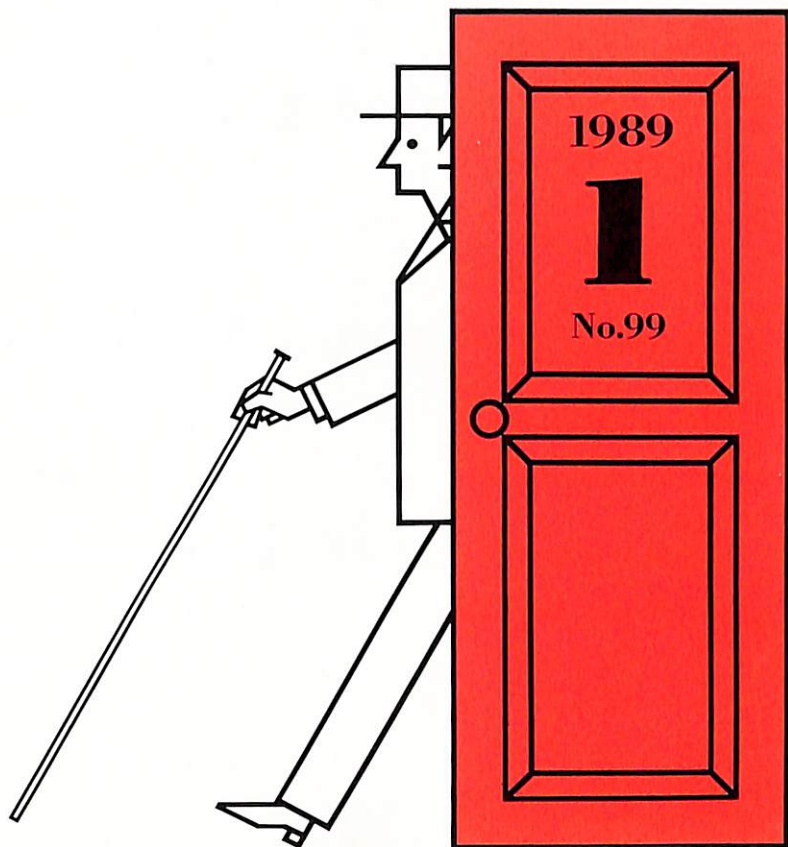


昭和四十六年六月一七日 第三種郵便物認可 昭和六三年二月一五日 SSK通巻第一七四八号(毎月六回、5の日、0の日発行)

# 視覚 障害

その研究と情報

特集\*盲人に対する社会の態度



ISSN 0385-7476

SSK

## 盲学生に理解と支援を

「盲学生情報センター」設立促進  
チャリティーコンサート

「歌はともだち」

眞理ヨシコ

夢の共演・意欲に満ちた盲人音楽家

島筒 英夫（ピアノ）

関 さち子（声楽）

田辺 藤祐（バイオリン）

林 直史（ピアノ）

「世界民謡・日本のわらべうた」

星 伊久江とコール・トゥインクルスター

琴：白根きぬ子と桐の実会

日 時：1989年6月23日（金） PM 5:30 開場 PM 6:20 開演

会 場：虎ノ門ホール（地下鉄銀座線虎ノ門下車 5 出口）

協力券：1 枚 2,500 円

ご協力くださる方は、日本盲人福祉研究会事務所まで  
お申し込みください。

日本盲人福祉研究会

〒166 東京都杉並区成田東 5-36-15

☎ 03 (220) 1421

# 目 次

1989年 1月 No.99

2 ページ評論……………茂木 幹央… 2

特集 盲人に対する社会の態度

社会の人々の態度を改善するための試み……………徳田 克己… 5

この人と語る

盲人の努力が社会通念を変える

……………橋本 宗明・河内 清彦…25

点字表記研究の変遷（5）……………阿佐 博…40

インフォメーション・コーナー……………51

編集後記……………66

## 2ページ評論

### 過剰な親切は盲人差別

養護盲老人ホームひとみ園園長 もぎ 茂木 みき お 幹央

今から4、5年前のことである。私は、ある団体から助成金を受けることが決まり、その交付式に1人で出席した。そうしてその交付式の後、昼食会が持たれた。私の座席の右隣りは都内のある特別養護老人ホームの施設長、左隣りは、ある大学の教授だった。私も食事をしようと思って、まず膳の上ののっている物のおよその状況を確認しようと思い、膳の上ののっている物を手で触ってみた。そうすると隣りの特養の施設長から声が掛かった。全盲の私に色々と親切に教えて上げようと思ったのであろう。しかし、その教え方は「さあ、ここにお魚があるぞ」というような調子で、終始まるで幼稚園児にでも接している時のような言葉使いであり、態度だったのである。隣りの大学教授が見るに見かねて「大体説明して差し上げれば、おわかりになるでしょう……」と言ってもくれたし、また、私も「どうもありがとうございました。もう大丈夫ですから、どうぞゆっくり召し上がって下さい」というようなことを、2・3回言ったのであるが、あれやこれやと一向にその調子は止まなかったのである。あの時私は「もう結構ですから止めて下さい」と大きな声で怒鳴るか、辛抱するしか道がなかった訳であるが、場所柄、私は辛抱する方の道を選んでしまったのである。その会合の後、私には著しく惨めな屈辱感が残った。「こんなことなら誰か1人職員を連れてくれば良かったなあ」と、後悔した次第である。

埼玉県内の老人ホームの施設長や理事長の会合の時にも、これと似たような経験を私はしている。会議の時には丁寧な言葉使いで接してくれていた人が、宴会の時に席が隣りになると私を子供扱いするような言葉使いや態度で接してくる人が時々いる。だから最近

惨めな思いをするのが嫌なので、晴眼者と一緒の宴会の時だけは職員を1人連れて行くことにしている。時々、施設長や理事長を対象とした1泊研修会というのがあるが、1人で参加すると惨めな思いをするし、2人で参加すると不経済なので、泊り込みの研修会には1度参加しただけである。

どうも晴眼者の中には、自分よりも行動能力の劣っている盲人を見掛けると優越感を感じる人がいるようである。

私の施設でも入園者が居室から食堂へ行く時など、廊下で迷っている時、「私が連れて行ってあげますよ」という言い方をした職員がいたので、私はその職員にそのような場合は「一緒に行きましよう」という言い方をしたい、と指導したのである。

人間には自分よりも劣った者や、弱い者を見掛けると優越感を感じたり、時と場合によっては、それらの者をいじめてみたくなるようなところがあるのではないかと、私は思っている。また、晴眼者が職場等で、盲人と競争し戦わなければならないような状態に立ち至った場合は、晴眼者は最終的には盲人の視力障害という欠陥について勝ちに出てくるということを、私は知っている。

社会は人間の集合体である。従って人間の持っている性質は、社会も持っているわけである。そのような観点に立てば「盲人に対する社会の態度」は自ずと想起される場所である。

私は盲人が晴眼者に伍して生存競争の社会を勝ち抜いていくためには、二つのものが必要だと思っている。その「二つ」とは何か。今、現実には人生ゲームの途上にある私としては、その「二つ」が何であるかを、ここでは記載しない方が良いように思う。読者の御想像にお任せして筆を置くことにする。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には  
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター  
までお問い合わせください。

## 編 集 後 記

優秀な種を残すという本能は、動物の一種である人間の本性の中にも深く根ざしています。障害などあって生きる可能性の弱いものを、動物は食い殺したり、放置したりしますが、人間は知性によって共に生きようとします。しかし、その心の奥深くに存在する蔑視や優越感はぬぐいようありません。それは障害者同士、盲人同士であっても同じことです。常に周りの人間と比較して、少しでも自分の優れた点を見付けては、存在価値のあることに安心しているのが人間です。そうしたものを一切否定したら、その人はおそらく人間社会では生きていけないでしょう。したがって、表面的にはともかく、差別するという意識は、人間の心から永遠に消えないと思います。

これは私の独断的な考えですが、心の奥深いところは別にして、人間にしかない知性によって、私たち障害者がいやな思いをせずに、楽しく生活していける社会が来ることには、私も大歓迎です

(田中 徹二)

### 視 覚 障 害

1989年1月 No.99

年間購読料 3,000 円 (送料とも)

発行日 1989年1月1日

編集人 (連絡先)

### 日 本 盲 人 福 祉 研 究 会

〒166 東京都杉並区成田東5丁目36番  
15号

電話 (03) 220-1421

振替口座 東京 6-16103

発行人 身体障害者団体定期刊行物協会

〒157 東京都世田谷区砧6-26-21

印刷所 合同印刷株式会社

〒130 東京都墨田区業平2-9-13  
電 話 (624) 6111 (代表)

協賛団体 日本点字図書館